

この報告書に掲載しているデータは、総務省統計局による平成17年国勢調査の第3次基本集計結果を基に、本市独自に地域や項目を細分化して集計したものであり、一部、すでに公表している「川崎市の人口(4)」と重複する部分があります。なお、本文は、統計表の内容の解説ですので、第3次基本集計結果の全体的な内容については、「川崎市の人口(4)」を御覧ください。

また、用語の意味については、「用語の解説」(P.11)を御参照ください。

1 親との同居

—労働力人口では、男性も女性も全ての年齢階級において「未婚」の同居率が最も高い—

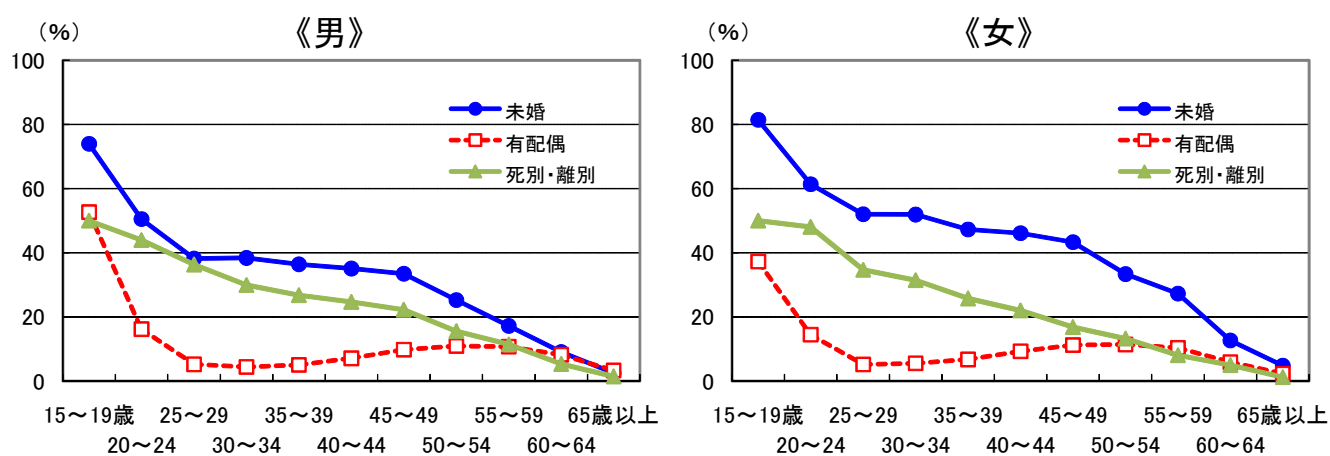
親と同居している割合(同居率)を、15歳以上人口の労働力状態(2区分)、男女、年齢(5歳階級)を分けて配偶関係(3区分)別に見ると、労働力人口では男性も女性も全ての年齢階級で「未婚」が最も高くなっています。また「未婚」及び「死別・離別」は、年齢が上がるにつれて同居率が低くなる傾向にあります。また「有配偶」は男性では35歳から、女性では30歳からともに54歳までの各年齢階級において、上昇傾向にあります。

一方、非労働力人口では、男性も女性も「未婚」は労働力人口と比べて同居率が高くなっています。また男性では「死別・離別」が20歳から29歳までの各年齢階級において、「未婚」を上回っています。

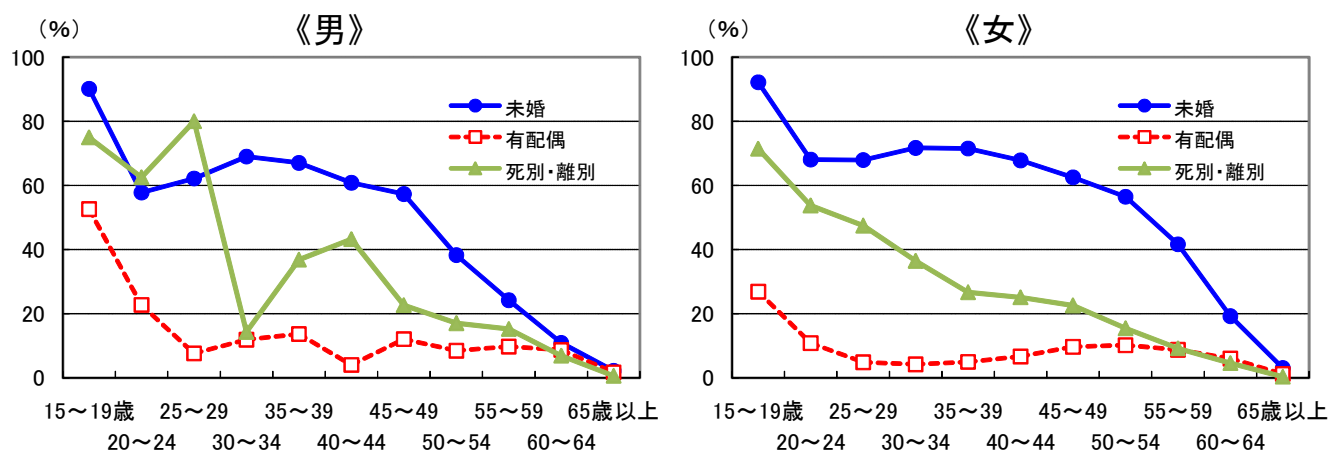
(図1)

図1 労働力状態(2区分)、男女、年齢(5歳階級)、配偶関係(3区分)別15歳以上人口の同居率(H17)

【労働力人口】



【非労働力人口】



－「主に仕事」では、未婚女性の同居率が未婚男性より 15.2 ポイント高い－

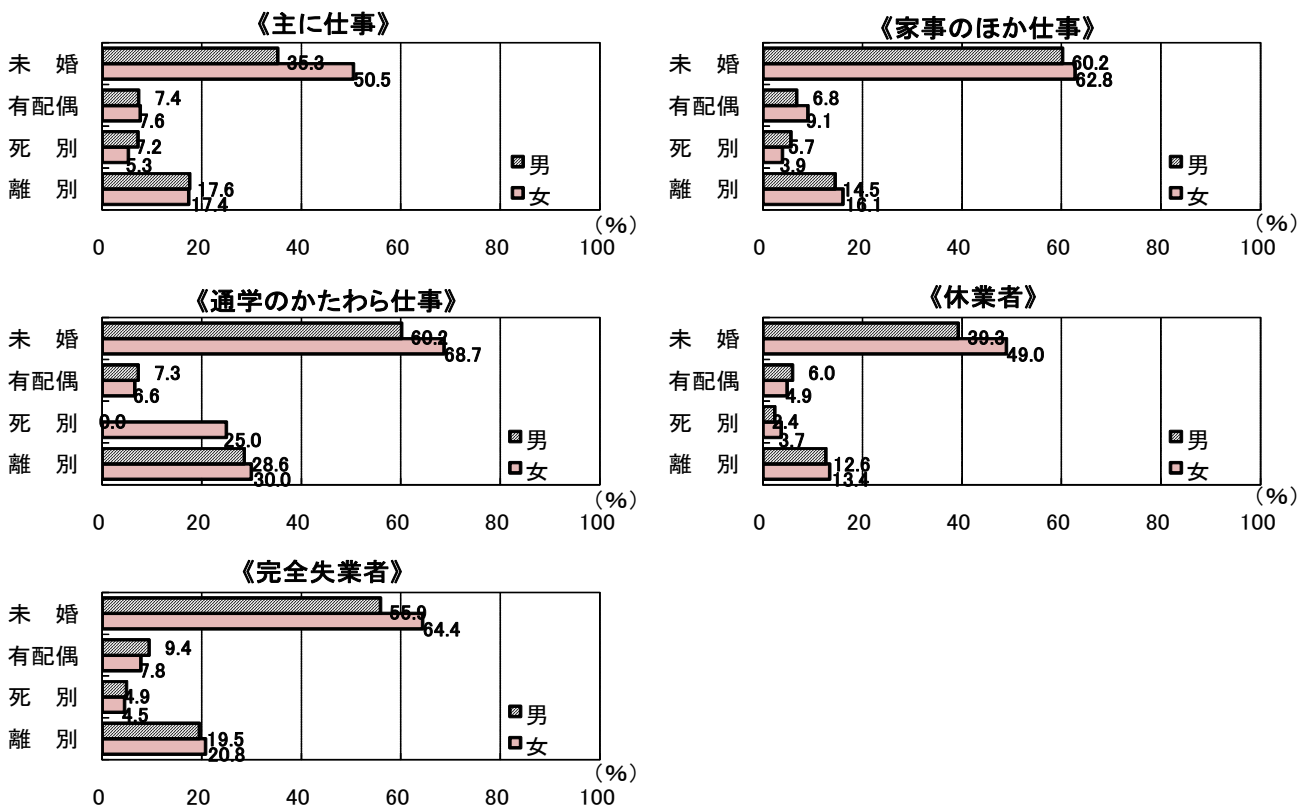
同様に同居率について、15 歳以上人口の労働力状態をより細かく 8 区分に分けてみると、労働力人口ではいずれの区分においても、「未婚」で女性が男性を上回っており、特に「主に仕事」ではその差が 15.2 ポイントと大きく開いています。ただし「未婚」女性では、「主に仕事」が、労働力人口における他の区分よりも低くなっています。

一方、非労働力人口では、「家事」及び「その他」において「未婚」で男性が女性を上回っており、労働力人口との違いが表れています。

労働力人口の「通学のかたわら仕事」や非労働力人口の「通学」といった、通学が関係する区分に着目すると、他の区分に比べて「未婚」及び「離別」における同居率の高さが目を引きます。(図 2)

図 2 労働力状態(8 区分)、配偶関係(4 区分)、男女別 15 歳以上人口の同居率(H17)

【労働力人口】



【非労働力人口】

